伝え続ける1・17

阪神・淡路大震災から30年

1995（平成7）年1月17日（火）午前5時46分、淡路島北部を震源地とする地震「阪神・淡路大震災」が発生し、国内で史上初めてとなった「震度7」の揺れを記録。死者・行方不明者は6,400人を超え、全半壊など被害を受けた住宅は約63万棟にのぼりました。

教育関係では、幼稚園児から大学生までの死者数418人、私立学校を含む教職員33人が犠牲になりました。また、父母のいずれかを失った震災遺児は374人を数えました。

避難所となった学校の教職員の多くは被災者でしたが、行政やボランティアが機能するまでの間、避難者の保護、その生存のための住空間や食料・水の確保など、避難所としての設備の運営と管理に忙殺されることになりました。その状況は徐々に緩和されましたが、その過程は学校によりさまざまな状況となりました。

大震災の経験は、生活環境だけではなく災害への意識や備え、教育に及ぶまで、私たちに大きな変化をもたらしました。

阪神・淡路大震災から30年を迎えるにあたり、その経験から得た教訓を次の世代へと伝え続けるため、当時、復旧・復興に尽力された教職員の経験談をもとに振り返ります。

神戸市東灘区本山南町6丁目付近

西宮市上甲子園3丁目付近

淡路市（旧北淡町）室津

JR新長田駅南西付近～鷹取駅付近

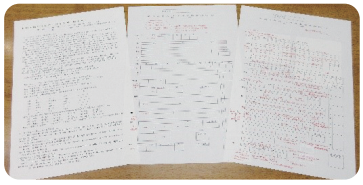
ほんとありがとう。生徒が喜ぶわ。

紀洲谷 浩市さん
神戸市立押部谷中学校 校長
当時/神戸市立玉津中学校

「要るだけ印刷して持っていけ」。勤務先の校長から瞬時に出た言葉が忘れられない。私立高校入試の2月15日（2月26日実施に延期）が迫る中、大きな被害を受けた学校に勤務する先輩から「入試が近づいてきたが、不安な生徒に勉強させてやる教材が何もない。印刷機も使えないから作ることもできない。助けてほしい」という連絡を受け、校長に相談したときの返答がそれだった。

勤務校も臨時休校（神戸市全体）が続いていて、状況確認の家庭訪問の際に配付しようと準備していたプリントの原稿があった。急遽、残っていた職員で印刷。段ボール箱いっぱいに詰めて、その学校へ届けた。段ボールが積み上がり、避難者があふれた学校の職員室から飛び出してきた先輩と教頭先生の「こんなに早く。ほんとありがとう。生徒が喜ぶわ」の言葉に涙が出た。

あれから30年。専門家の間で語られる30年たつと継承が難しくなる「30年限界説」のターニングポイントを迎える。継承の基盤は「語り継ぐ」ことだ。「語り継ぐ」場としての学校の役割は大きい。教材になっていたり、報道に取り上げられたりするような出来事だけでなく、私のような小さな出来事も身近にはたくさんある。神戸、淡路、いや兵庫の教職員には「語り継ぐ」ことの大切さをしっかりと受け止めて、目の前の子どもたちにその思い、願いをこれからも伝えていってもらいたい。


印刷されたプリント
1人あたり50頁ほど渡すことができた

子どもたちの活躍が みんなに笑顔を

佐々木 勉さん
阪神淡路大震災記念人と防災未来センター、
ふたば学舎等で語り部・防災士
退職会員（神戸市）
当時/神戸市立二葉小学校　教育復興担当教員

私が勤務していた二葉小学校周辺は、阪神・淡路大震災で激しい揺れに見舞われ、大規模な火災が発生した。私のクラスでは、約半数の児童の自宅が全焼や全壊、半壊の被害を受け、生活がままならない状態になった。二葉小学校は避難所になり、子どもたちと避難の方々が共に生活する日々が続いた。

全国からたくさんの応援を受けた子どもたちは、自分たちも何かをしたいと考えるようになった。1996年度から、教育史上初めての「教育復興担当教員」の任を受けた私は、子どもたちを真ん中に、家族・地域・学校の連携を深める活動を工夫した。「ふたばボランティーズ」として、課外時間を利用し、学校周辺の清掃、学校行事の案内状のお届け、避難者の肩たたきなどを行った。そうした中で、大人は笑顔を取り戻し、子どもたちにも喜びが広がった。

震災から3年目に、こわれた焼却炉のレンガで記念碑を建て、子どもたちが「やさしさわすれないで」との言葉を刻んだ。震災直後、一緒に遊んでくれた大学生ボランティアの優しさが、子どもたちの心にずっと残っていたのだった。

子どもたちは、それぞれに力を持っている。私たち大人が子どもたちの活躍の場を工夫し、共に歩んでいくことが大切だと感じている。

記念碑「やさしさ わすれないで」

神戸市立
二葉小学校の様子

避難所となった
西宮市立高木小学校

追悼から防災へ、想いを行動につなげよう。

白井 弘一さん
神戸大学・関西大学 非常勤講師
退職会員（西宮市）
当時/西宮市立鳴尾南中学校

JR西宮駅近くの自宅で被災。数軒隣の生き埋めの人の救出に苦闘するも、5時間後に救出。社会科教員として、この未曽有の震災のありのままを残さなければ、その一心で、日々多忙を極めたが、文章記録を残し、外出時には家庭用ビデオカメラを少しでも回した。

家にも近い前任校の校区は被害甚大。教え子やその保護者の葬儀は辛かった。斎場の再開後、まちには葬儀案内の看板が溢れた。市内南部の勤務校周辺は液状化現象が激しい。4日後には生徒全員の消息確認ができた。学校避難者は少なかったが、グラウンドは給水場、武道場は支援物資仕分けの東部拠点となり、校地内に仮設住宅の建設も始まった。まさに非常時だった。

1月24日、生徒会長の「先生、僕たちに何かできることはない?」との言葉をきっかけに、生徒会執行部の生徒たちは自治会の手伝いを始めた。生徒会は続いて生徒たちによる高齢者への給水ボランティア活動を企画。生徒会室を事務局に、武庫川団地の高層階に住むお年寄り等から希望を募り、30日の学校再開初日から本格的な活動を開始。協力者は増え、145人が水道復旧の2月18日まで毎日地域で活動した。中学生ともなればたのもしい。その企画力、行動力には驚かされた。

追悼の気持ちを防災の行動につなぐことが肝要だ。地震に限らず「すわ、一大事」という大きな災害は起きる。現実の学校生活の中でこつこつ身につけてきたことが、図らずも災害時に活き、力が発揮される。人は共に生きることができる。

白井さんの撮ったありのままの映像は28本の動画に編集され、神戸大学・震災文庫デジタルギャラリーにて閲覧できます。以下はそのうちの3本の動画にアクセスできる二次元コードです。

- 阪急西宮北口駅付近名神落下、市場被害（約3分半）
- 西宮市、国道2号線札場筋交差点付近（約7分）
- 三宮の惨状、元町や南京町の元気な様子（約3分）

だからこそ今、伝えたい震災の記憶

福原 広行さん
洲本市立中川原小学校 校長・防災士
当時/西淡町立志知小学校

あの日々から30年。当時現場で震災を経験し奮闘された先輩方の多くが、学校を退職されました。淡路地区年齢別構成表※1からの概算ですが、当時の学校を知る教職員は約26%になりました。「震災の記憶」の風化が一層懸念されています。

現在ほどの知識や経験が無い状態で教職員は手探りの状態で学校を守り続けました。避難者で埋まる体育館・教室・廊下、トイレの問題、その他多くの困難が押し寄せる事態に、懸命に奮闘しました。中には、ご自身も被災された方、教え子を亡くされた方もおられました。その後EARTH※2が発足し、また防災教育や災害に備え多種多様な組織も設立され、災害支援は進展をしていますが、あの日々の奮闘があったからこそだと思います。

また近年、「百年に一度」級の災害が日本各地で発生し、巨大地震と津波の脅威も高まっています。私は、「震災の記憶」を継承することが、次の10年、その次の10年へ災害のリスクを減じる手立てだと考えます。当時現場で奮闘された方々の思いを受け継ぎ、震災の記憶を語り継ぐ必要性を感じています。震災を歴史の1頁にしてはなりません。震災から30年に際し、だからこそ今、「震災の記憶」を伝え、伝え続けたいと願っています。

※1 淡路教育事務所 令和6年度学校要覧 5.職員の校種別・性別・年齢別構成　※2 EARTH 震災・学校支援チームの略称

震災からの教育復興30年

立野 亮さん
神戸市立義務教育学校港島学園
（後期課程）主幹教諭
震災・学校支援チーム（EARTH）
学校教育班 班長

私は、震災直後の4月に神戸市教員として採用された。直接の被災体験はないが、混乱の中でのスタートだった。震災からの30年は、神戸市での教職人生そのものだと言える。

阪神・淡路大震災発生前における「防災教育」は単発の避難訓練や特定の教科の一部における「点としての学習」というものが一般的であった。県教委は震災直後に、防災教育検討委員会を開催し、人間教育の視点に立ち教育の創造的復興をめざす「新たな防災教育」の提言を行った。その提言を踏まえ、授業の中で随時防災について取り上げることができるように、防災教育副読本「明日に生きる」を作成した。また、節目の年ごとに記録をまとめ、実践の検証を行うことでより取組みを進化させていった。これまでの災害を防ぐという視点の防災教育から、震災経験をもとに生命への畏敬の念や、助け合い、ボランティア精神等「共生」の心を育む「兵庫の防災教育」へと転換していったのである。

東日本大震災や能登半島地震を契機に、避難所等におけるさまざまな課題が顕在化している。高齢者、障がい者、外国人等々社会的弱者と呼ばれる方々に関するものだ。戦争と同様に災害において一番影響を受けるのはその人たちである。まさに、人権的課題と言えるだろう。今後の防災教育においても、大切にしていかなければならない視点だと思う。防災について学ぶことは、人権について学ぶことに繋がっていくと感じている。今後も、子どもたちとともに自分自身も学んでいきたい。

次世代に伝え続けたい　皆さんから寄せられた、メッセージを紹介します

勤務先の附属住吉小中学校で震災に遭遇した。泊まり込んで仕事をしていた同僚が門を開放し、近くの同僚の助けを呼び、当初二人で対応した。3日後、なんとか半数程度の職員が集まった。運動場にはクラックが、グランドピアノは足折れ傾き、いたるところにひび割れ、ガラス割れ、避難者はとりあえず、体育館で寝泊まりしていただいた。

天災は忘れたころにやってくるは、昔のこと。忘れないでもやってくる。阪神・淡路大震災から始まった、ボランティア元年の心意気は風化させまい。　【明石市/70代】

多くの命と生活が失われたけれど、ボランティア元年と謳われるほど、新しい絆が生まれました。建築基準の見直しも進みました。中学生に理科を学んでもらう身として、地震を正しく怖がり、対策を考えて実行にうつし、人と人の繋がりを大切にする力を育み続けていきます。　【丹波市/40代】